

テーマ「作品「舞姫」が私たちに教えていること

①はじめに

わたしがこのテーマでレポートを書こうとした理由は授業で人間関係について調べたり、話し合ったりした時に豊太郎の性格はすごく特徴的で複雑な物語になっているなと思い、きっとこの本は何か伝えたいことがあるはずで、それが何なのかを探ってみたいと思ったからである。

まずこれからの論は(i)豊太郎の人生から伝えたいことを考え、次に(ii)なぜ「舞姫」を高校の教科書に載せたのか選んだ人の伝えたいことを考えて結論を導きたい。

このレポートでは人生はたくさんの事が起こるもの、それをどうやって生きていくのか、自分自身で考えるべきだと教えられていると述べていこうと思う。

②本論

(i)豊太郎の人生から伝えたいこと

まずこの舞姫を読んでみると非常に波乱万丈な人生を豊太郎は生きていることがわかる。その根拠は「余は幼きころより厳しき庭の訓えを受けし甲斐に、父をば早く失ひつれど、学問の荒み衰ふることなく、旧藩の学館にありし日も、東京に出でて予備校に通ひしときも、大学法学部に入りし時も、太田豊太郎といふ名はいつも一級の首に記されたりしに」このように、幼いときから勉強ばかりしていたことがわかる。父が亡くなったら悲しみにふけて勉強ができない時もあるだろう。しかしこの文章からはそんな様子はいかたがえな。豊太郎はひたすら勉強をしてすごく賢かったということがわかる。しかし、ベルリンの大学に行き、大学の風に当たった時に「余が幼きころより長者の教えを守りて、学びの道をたどりしも、仕への道をたどりしも、みな勇氣ありてよくしたるにあらず、忍耐勉強の力と見えしも、みな自ら欺き、人をさへ欺きつるにて、ひとのたどらせたる道を、ただ一筋にたどりしのみ。」「ただ外物に恐れて自ら我が手足を縛せしのみ。」と今までの豊太郎は勉強もできるし自分に自信もあったけれど本当の自分は人に与えられた道をただただどってきただけで人の期待を裏切れることを恐れ、外物に恐れるためにやりたいことを我慢してしまう自分の意志では行動できない臆病な人間だということを豊太郎は知ることになる。そしてそのあとのクロステル港でエリスという少女を見つけ自分から話しかけていくのである。「我が臆病なる心は憐憫の情に打ち勝てて」とあるが、どうして上にも書いたように臆病で自分の意志では行動できない豊太郎がエリスに話しかけることができたのか。それはクロステル港の風景にある。ここの風景描写では「この狭く薄暗く港に入り」や「三百年前の遺跡」のように暗い地味な風景描写が描かれている。この地味なクロステル港の空気は豊太郎に似ている。この空気に背中を押されたからこそきっとエリスに近づく1歩が踏み出せたのだと考える。そしてエリスの顔を見たときに一目ぼれする。「この青く清らにても問ひたげに愁ひを求める目の、半ば露を宿せる長き睫毛に覆はれたるは、何故に一顧したるのみにて、用心深き我が心の底までは徹したるか。」よりここを始まりとしてエリスと豊太郎はつきあい始める。そして「同郷人のうちに事を好む

人ありて、余がしばしば芝居に出入りして、女優と交はるといふことを、官庁のもとに報じつ。さらぬだに余がすこぶる学問の岐路に走るを知りて憎み思ひし官長は、つひに旨を公使館に伝へて、我が官を免じ、我が職を解いたり。」エリスと付き合うことにより学問も充実せず仕事も止めるはめとなってしまう。けれども相沢に新たな仕事を紹介してもらい仕事をするようになる。「彼は某新聞紙の編集長に説きて余を社の通信員となし、伯林にとどまりて政治、学芸のことなどを報道せしむることとなしつ。」そして明治二十二年に大日本帝国憲法が制定された。その前の年二十一年の冬には本当だったら豊太郎はこの制定に関係していた人で日本に帰らなければならないはずなのにやめてしまったためにクロステル街で不安を感じている。それはこのクロステル街の風景描写による、「雀が落ちて死にたるも哀れなり。」ここから雀は飛び立つもの、豊太郎も本当は飛び立つ人だったのかもしれない。それが死んでいる。つまり、そこで豊太郎は今の自分の位置を再認識し、自分のこれからの不安を感じているとわかる。また、「物食ふごとに吐くを、悪阻といふものならんと初めて心づきしは母なりき。」とエリスは妊娠をする。そのあと豊太郎は「さらぬだにおぼつかなきは我が身の行く末なるに、もしまことなりせばいかにせまし。」不安定なのは自分の将来だといっている。本当は賢くてもっといい仕事につくべき人がエリスとつきあったということだけで将来に不安を感じながら生きている。「もと生まれながらなる弱き心より出でしなれば、いまさらに言はんも甲斐なし。とはいへ、学識あり、才能のある者が、いつまでか一少女の情にかかづらひて、目的なき生活をなすべき。」豊太郎自身も自分の行き方にあまり納得していないことがわかる。そしてついに豊太郎は病気となり、「膝のしきりにをののかれて立つに堪へねば、椅子をつかまんとせしまでは覚えしが、そのままに地に倒れぬ。」そして数週間後に「余は初めて病床に侍するエリスを見て、その変はりたる姿に驚きぬ。彼はこの数週のうちにいたく痩せて、血走り目は窪み、灰色の頬は落ちたり。」「いたく罵り、髪をむしり、布団を噛みなどし、またにはかに心づきたるさまにて物を探り求めたり。」とエリスは発狂してしまった。そして「我が病は全く癒えぬ。」こうして物語は終わる。

このように本当に豊太郎は波乱版万丈な人生を送ってきた。きっと豊太郎はエリスの声かけ、免官、将来の不安など、ひとつひとつの壁にぶち当たる時、こんなことが起こるなんて予想もしていないだろう。予想していたなど本文には書かれていない。つまり、豊太郎は目の前にあることたくさん悩んで自分で考えて乗り越えてきたのだ。その根拠は豊太郎の病気の原因でもあると思う。「ああ、なんらの特操なきところぞ、「承りはべり。」と答えたるは。」のように豊太郎は自分のしたことに対して後悔し、マイナス思考になるということがわかる。そして自分を追い詰め、悩んだり病気になったりしてしまったのだ。私たちに教えたことはつまり、人生はいろいろあるからひとつひとつを悩み考えクリアしていくべきだということ。豊太郎みたいにマイナスに考えすぎてもいけない。という忠告もしてくれているのだと思う。

(ii)なぜ「舞姫」を教科書にのせたのか

その疑問に対して、伊藤氏貴先生はこういっている。

「かつて高校の国語の教科書は『舞姫』と漱石の『こころ』を抜くことをどの出版社もためらっていた。つまり、ある年齢層の日本人のほぼ全員が『舞姫』に接していた時期があったということであり、しかも倫理を必修としない高校という教育現場にあって、『舞姫』と『こころ』は暗黙のうちに道德教育の一翼を担わされてきたという事実がある。」

道德教育を調べてみると「子どもに一定の行動様式や態度を身につけさせ、一定の価値を志向させ、理想を自覚させる教育。」と書いてあった。

つまり、私たちは舞姫を読むことを通して自分達が正しい道を生きていくための勉強をしているのだ。そして、教科書にのせたたくさんの人に、たくさんの世代の人が読むことによってたくさんの人が舞姫からたくさんのことを学ぶことができるのだ。それは恋を優先し免官になったことも、エリスが妊娠したことも、豊太郎が病気になり、またエリスが発狂したことも…すべて私たちの人生で起こりうることである。人生では何が起こるかわからないということを教えられているのだ。

またなぜ高校生にこれを読ませるのか。についてはそれもやはり、今から社会に出ていかなければならないこの時期だからこそ、学んでおかなければならないことなのだ。だから私は教科書にのせたのだと考える。

- ③結論 私は「舞姫」という作品は、人生はたくさんの事が起こるもの、それを自分自身が人に流されて生きるのか、自分の意志をもって生きるのか、どうやって生きるのかということをしっかり考えるべきだと教えていると考える。
- それが筆者森鷗外の言いたかったことでもあるし、舞姫を教科書にのせた人の伝えたかったことでもあると思う。

参考文献：『森鷗外「我百首」と舞姫事件』書評